

# 近代ヨーロッパのペシミズム<sup>1</sup>

鎌田康男（関西学院大学）

はじめに

ペシミズムの本質は、現実世界に向けられた批判的なまなざしである。世界 ことに、現代の西欧（化された）世界<sup>2</sup> は、さまざまな欲望が渦巻く現実を無批判に受け入れ、欲望充足の円環構造を無限増殖することによって成り立っているように見える。欲望の自己増殖が人の心、社会、自然環境に与えるダメージには目もくれようとしない。これに対してペシミズムは主張する 「世界は最悪である」。それは現状を最善のものとして盲目的に受け入れ賛美する西欧的世界を「生への意志の肯定」として示しつつ、これに「ペシミズム的還元」を施し、意志の自己否定、意志の鎮静という新たな地平を開く。

「ペシミズム」はその反対語である「オプティミズム」と同じく、近代市民社会の造語である。しかし、現実批判としてのペシミズムは、思想の歴史と同じくらい古い。本稿のねらいは、次の二点に集約できる。 現実批判としての「ペシミズム」が、とくにヨーロッパ世界において果たした思想文化史的役割を、ショーペンハウアー哲学の視点から評価すること。そこから 西欧の文化形成に深く関わってきたキリスト教における「ペシミズム」的要素を検討し、「ペシミズムと宗教」をめぐる議論への提題とすることである。

## 一 ヨーロッパのペシミズム

名のないペシミズム ~ 名付けられたペシミズム ~ 名を失ったペシミズム

ヨーロッパ思想文化史におけるペシミズムを考察するにあたり、その特徴を際立たせるために、近代市民社会以前の「名のないペシミズム」と近代市民社会、ことに産業革命期以降の「名付けられたペシミズム」とに分けてみよう。両者に共通するのは現実への批判的なまなざしであるが、明らかな相違も認められる。さらに、ペシミズムの現代的形態を「名を失ったペシミズム」として描いてみることにしたい。

「名のないペシミズム」と「名付けられたペシミズム」を区別する理由は、第一に、ペシミズムという表現が存在しない近代以前の思想をペシミズムと呼ぶのは、ひとつのアナロジーであり、近代市民社会において自覚的にペシミズムと名付けられるものと不用意に同一化することの危険に注意を喚起するためである。しかし同時に、第二に、両者を区別しつつ、非・近代西欧(的)思想における「ペシミズム的なもの」の意義を問う姿勢表明でもある。

## 二 近代ヨーロッパのペシミズム 名付けられたペシミズム・負け惜しみのペシミズム

近代市民社会は、既成の存在秩序、たとえば伝統的同業組合を無効であると見なし、なきものとし、新たな存在秩序の構築を意欲した。新製品を開発し、新しい市場戦略を産みだし、そして何よりも貨幣経済とその帰結であるグローバル経済とに代表される新たな経済システムを構築しつつ、既成の秩序を駆逐していった。

カントからドイツ観念論を経てショーペンハウアーに引き継がれる「意志」の概念は、近代市民の思考行動様式に与えられた別名である。<sup>3</sup> カント以降の伝統では、意志は一定の表象によって対象を産出、ないし規定する能力であり、ショーペンハウアーによれば、表象としての世界も意志が認識能力に働きかけたことによって生じるファンタスマに本質的に依存している。<sup>4</sup>

新たな存在秩序を構築し、その目的の実現に向かって突進する意志が強いほど、障害に突き当たったときの反動も大きい。一八四八年の革命の失敗、経済発展にもかかわらず拡大する社会的格差、ヨーロッパの繁栄を支えた植民地における独立運動、そして世界大戦の時代へと、様々な障害が立ちはだかることになったのである。

「名付けられたペシミズム」は、近代市民社会特有の欲望と生への意志とがあおられ、強められ、ついに障害に突き当たって挫折したときに、「いくら努力しても無駄なことさ、最悪の世界なのだから」と、自分に言い聞かせる負け惜しみのペシミズムである。そのために、世界を最悪であると認識するにとどまらず、砕かれた意志への反動として「厭世的」

に世界に背を向けることになる。そのような厭世観が欲望と生への執着と表裏一体であり、それ自身が一つの自己矛盾である、ということ、ショーペンハウアーはその自殺論において示した。<sup>5</sup>

ニーチェもそのような事態を正しく理解しており、ペシミズムの背後にデカダンスとルサンチマンを見たのであった。そのような意味で、負け惜しみのペシミズムは、十九世紀後半のペシミズムの本質をなすと言ってよい。しかし、自分自身の生命の充溢に基づくディオニュソス的ペシミズム以外のすべてのペシミズム的思考を、伝統的キリスト教におけるペシミズムをも含めて十把一絡げに生命力の低下、すなわち弱者の自己保身欲によって説明しようとしたニーチェは、その限りにおいて十九世紀後半の近代市民社会の思考行動様式を体現する意志の形而上学者であった。<sup>6</sup>

### 三 現代消費社会における名を失ったペシミズム 創造から消費へ

私たちは近代市民社会の直系社会に生きている、少なくともそのように考えられることが多い。私たちの国家理念は、近代市民社会のそれを継承しているように見える。新日本国憲法は、アメリカ合衆国憲法やフランス人権宣言の系譜に位置しているではないか。しかし、近代市民社会は十九世紀末を境に消費社会へと変化をとげた。それによってペシミズムの意味も変化した。「名のないペシミズム」へと問い進む前に、この点についても言及しておきたい。

近代市民の思考行動様式は、哲学的には新たな存在秩序を構想し実現する「意志」の概念に集約される。新たな存在を産みだす自由な創造は、同時に産みの苦しみをともなう。物資の消費に伴う利便と快楽は、生産の労苦によって担保されていたのである。

しかし、産業革命による生産量の飛躍的増大と共に、生産と消費の分離が進む。必要があるから生産するのではなく、生産すればするだけ儲かるから生産するのだ。生産は消費を度外視した自動機械(industria, business)となる。生産の余剰部分は当面、国家的な大量消費（その代表格が軍事産業とその帰結としての戦争であった）によって吸収された。こ

の解決方法は現代の覇権主義国家が今なお好んでとる方法である。だが、その対価はあまりにも大きい。消費の主体は軍から民へと移行する。個々の市民の消費を活性化するために、消費のシステムは消費欲求のシステムへと組み替えられ、営業と宣伝の領域へと委譲される。社会及び家庭における生産者と消費者の分化が進み、純粹消費者であることは美化された。この社会観の変化に、ハリウッド映画が果たした「功績」は大きい。欲求の無限増殖こそが、生産と切り離された消費を無限運動(perpetuum mobile)とすることができるのである。生産を忘れた消費大衆は、無反省に消費欲求の無限増殖を生きる。 專業生産者としての夫は残業に明け暮れ、その間妻は買物へ（有閑マダム）、子どもは大学に籍を置きつつ消費大衆へと純粹培養される（大学の遊園地化）。無限増殖する（させられる）欲望という名の癌細胞は、今や残されたあらゆる非生産者集団を餌食とする 老いる人々を死に至るまで追いかけて、死を一層不安なものとする。そして最後の犠牲者は、心身にハンディキャップを負う人々だろう。こうして人間は、経済の持続的発展のために責任能力の限界まで、いな、自己の責任能力の限界を超えて消費へと駆り立てられることになるだろう。現代消費社会は、盲目的な生への意志の肯定の極限状態である。

生産を忘れた消費社会は、価値が生産によってではなく、無限の交換によって、マネーゲームによって産みだされると信じた。消費動向こそが経済的活力の指標となった。消費社会は、生産の担保を失い、過渡的形態としての金の担保も失い、シャボン玉のようにふくらみ、シャボン玉のようにはじけた。しかし、生産の労苦を憎む消費大衆は、負け惜しみのペシミズムを産みだすだけの知的労苦にも耐えられず、テレビや街角にあふれる食欲・性欲・自己顕示欲・所有欲といったプリミティブな欲望の充足に短絡的に逃避する。かつての創造的欲望充足の代償行為にふけりつつ、自らを自由であると錯覚する。映画『マトリクス』の青いピルを選び取ったのである。そこにあるのは、「名のないペシミズム」とも「名付けられたペシミズム」とも異なる、「名を失ったペシミズム」、「究極のペシミズム」である。

#### 四 名のないペシミズム

近現代のヨーロッパ的ペシミズムは、創造的意志の理想化、欲望の無限増殖、そしてすべての「人間らしさ」を欲求充足へと格下げすることによって特徴づけられる。それは個々人のアイデンティティ、社会環境、自然環境を危機に追い込みつつも、大衆消費物資の生産・流通・消費の拡大によって、無限にふくらむバブルの夢を見せた。日本の経済復興は、大衆消費物資の生産・流通・消費の再拡大によって達成されると信じる時代錯誤がまだまだ根強い。

しかし私たちは、「ペシミズムと宗教」という共通テーマによって、近代市民社会のペシミズムとは別のペシミズムの可能性を捜し求めている。それは自己中心的な欲望の充足の神聖化によって、すべての公共性（ポリテイア）を家政（オイコノミア）へと解消した近代市民社会の盲目的な生への意志の肯定の代償としての負け惜しみのペシミズムではありえない。<sup>7</sup>

「名のないペシミズム」は、欲望の賛美が世界をあるべき世界とあるがままの世界に分裂させ、その分裂によって人を自己矛盾と争いに突き落とすことを、欲望の自己増殖に先立って感知し、注意深い欲望の制御、意志の鎮静へと導く。ヨーロッパにおいてそのような予見的で注意深いペシミズム（vorsichtiger Pessimismus）の役割を担ったのがキリスト教であった。この時期に至るまでの数世紀 ヤスパースは枢軸時代と名付けているに、古代ギリシャ、古代ユダヤ、古代インド、古代中国でそのような注意深いペシミズムの性格を帯びた智慧が多様な仕方で現れ、それが儒教、仏教、キリスト教など、その後の人類を導く諸宗教へと結実していったのは興味深い。注意深いペシミズムという観点から、教義の多様性にもかかわらず、諸宗教の対話のひとつの地平が見出されるであろう。

キリスト教は、少なくともその初期においては著しく現実批判的である。それは、イエスが当時のユダヤ教に対して行った体制批判だけではない。むしろ、自然人としての人間の内的現実 その自己中心性への洞察と批判こそが、初期キリスト教におけるペシミズムの根幹をなす。アダムが神の掟にそむいて犯した罪（原罪）こそが苦と死との原因であ

り、罪を悔い改め、キリストにおける愛の共同態（教会）に立ち帰ることによって人は平安と永遠の命とを得る<sup>8</sup>、というメッセージはキリスト教の根幹をなすものである。誤解を恐れずに述べるなら、日本における一般的なキリスト教理解、すなわちキリスト教の根本を「唯一神の存在」に求めるという理解は、キリスト教の現実的生（個としての、および共同態の生を含む）への関わりから眼をそむけ、一つの神話的反自然科学的教理体系へと矮小化してしまう危険がある。「神の存在」（神学的には神の存在証明）というテーマ自身が、キリスト教がイスラームと抗争関係に入る十一世紀以降に成立するものであり、それまでは神は「存在する」というより「生きる」といわれることが多かったのである。いずれにせよ、キリスト教を「名のないペシミズム」として理解することは、キリスト教の根幹に人間の原罪性、すなわち自己中心性への洞察を見る、ということの意味する。愛の共同態にそむく自己中心的な欲望充足への性向を「罪」という定式にもたらしたうえで、そのような罪の奴隷状態からの解放こそがキリスト者の真の自由であるとする思想は、キリスト教の歴史において極めて重要な流れを形成している。奴隷（僕）とは、主人に仕えて自己自身を思うとおりに制御できない状態である。だが、身分としての奴隷以上に、思慮を欠き、自己の欲望に支配される奴隷の心、罪の奴隷状態こそが克服されなければならない、その自己中心的な思考行動様式を転換し（改心し）、新しく生まれる必要があると考えられたのである。ちなみに、このような奴隷理解は、古代ギリシャ・ポリス世界においてもひろく受け入れられており、そのような思想的近親性が、キリスト教のヘレニズム世界への伝播を容易ならしめたとも言える。<sup>9</sup>「神の貌にて居給ひしが、・・・僕の貌をとりて人の如くなれり。・・・己を卑しうして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給へり。」<sup>10</sup>と描かれるキリストは、主と僕を逆説的に読み替えることにより、まさにそのような自己中心性からの解放の模範となった。

後世のしばしば排他的・攻撃的な「信仰」ではなく、すべてを、自分にとって好ましくないもの（苦）、好ましくない人（敵）までも受け入れる「キリストのまねび imitatio Christi」の思想が成立する。劇的に描写されることが多い殉教物語も、中世における清貧

も禁欲も、本来は、天国に行くという「最大の欲望」を満たすためというより、キリストのまねびの表現と解されるべきものであった。自らの自己中心的な心の貧しさに直面してへりくだる者だけが、神に出会うのである。「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。・・・幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。」<sup>11</sup>

名のないペシミズムは、挫折による名付けられたペシミズムと異なり、それが働いている限り、ペシミズムとしては自覚されない。なぜなら、自己中心の挫折ではなく、予見的で注意深い自己中心の克服こそが関心事だったからである。もっとも、自己中心的意志の克服自身が克服への意志として、挫折の危険に瀕する、というパラドックスは常に自覚されていた。マイスター・エックハルト<sup>12</sup> に代表される中世神秘主義の流れ、ことにチューリングンの聖エリザベートの生涯は、このパラドックスとの格闘そのものであり、自己犠牲的な隣人愛の行為の原点として理解されなければならない。そして同種の問題意識がショーペンハウアーにおいては「意志の否定」、すなわち近代市民社会において怪物的な規模へと膨張した存在構築への意志の鎮静の思想へと結実したのである。

## 五 ショーペンハウアーのキリスト教観

キリスト教におけるこのようなペシミズム的要素に注目するならば、なぜショーペンハウアーがキリスト教の本質をペシミズムと考えたか、容易に理解できる。<sup>13</sup> ショーペンハウアーのペシミズム理解は、「厭世主義」 世界への精神的不適應を白状すること ではない。人間の自己中心性（エゴイズム）の不在を道德の根源におくこと<sup>14</sup> にこそ、ショーペンハウアーのペシミズム論の核心がもっとも明確に表現される。それはキリスト教の伝統に見られる名のないペシミズム、ないし注意深いペシミズムに限りなく近い。ショーペンハウアーは、イエスの教えの本質はペシミズムであるとした。しかしながら、近代市民社会的・自己利益肯定的・楽観主義的なキリスト教の諸形態の繁栄によって誤解の危険が大きかったキリスト教<sup>15</sup> に替えて、仏教をペシミズムの宗教の代表格として評価したのだった。

同時に、晩年のショーペンハウアーが自らの哲学をペシミズムと「名付ける」に至って、さまざまな誤解の種を蒔いてしまったことも、看過できない。実際、ショーペンハウアーに対する批判の多くは、彼のペシミズムを反抗的できむずかしく、負け惜しみの強い性格に帰している。<sup>16</sup> それによって、負け惜しみのペシミズム（その本質は盲目的な生への意志の肯定）を生みだした近代市民社会への批判を本質とするショーペンハウアーのペシミズムが見誤られた。しかし、それらの誤解にもかかわらず、ショーペンハウアーによって提起された「ペシミズム」への問いは、自己利益（多くは経済的自己利益）至上主義へと凝り固まり、「人間とはそういうものさ、だから私もそのように自己利益を求めて生きるほかかない」と、公然とあるいは内心で開き直る自己中心的な究極のペシミズムに対して、別のもう一つの生き方　注意深いペシミズム　を指し示す。それは、時代の波にもまれながらも、現代にまで生き続けた諸宗教と共有することのできるメッセージではないだろうか。

---

<sup>1</sup> 本稿は、二〇〇二年十月五日、大正大学で行われた第十五回日本ショーペンハウアー協会全国大会シンポジウム「ペシミズムと宗教」における提題原稿に手を加えたものである。

<sup>2</sup> ここで「西欧（化された）世界」と呼ぶものは、いわゆる西ヨーロッパ世界に限られるものではない。むしろ西欧においては、キリスト教におけるペシミズム的要素が自浄作用を果たしていたのに対し、それらの伝統を意図的に排除することを目指したアメリカ合衆国や、主としてアメリカ経由で近代市民社会の欲望肯定的側面のみを受容した日本においてその矛盾は特に顕著であり、それが行きすぎた経済的利益至上主義（エコノミックアニマル文化）を生みだし、自然環境および人間環境の破壊へと結びついている。凶悪犯罪の急増、京都議定書の拒否　それが合衆国のようにあからさまに批准の拒否という形をとろうとも、日本のように実質的な不履行という形をとろうとも　は、西欧的オプティミズムのグロテスクな拡大図に過ぎない。これに対して、アメリカ合衆国建国時以来のピューリタンの伝統や日本でも独自の仏教的伝統などに由来する対立要素が存在するが、それらは現代において一般的な市民意識に十分浸透していないと考えられる。こうした個別的な、しかし重要な問題には別の機会に立ち入って考察したいと思う。

<sup>3</sup> 拙著「ミレニアムのショーペンハウアー」、鎌田・齋藤・高橋・臼木訳著『ショーペンハウアー哲学の再構築』（法政大学出版局、二〇〇〇年）

<sup>4</sup> Yasuo Kamata: *Der junge Schopenhauer. Genese des Grundgedankens der Welt als Wille und Vorstellung*. Freiburg/München: Alber, 1988, S. 188ff.

<sup>5</sup> WI, 471f §69（『意志と表象としての世界』）；PII, 325-330 Kapitel 13（『余録と補遺』・「自殺



---

について」).

<sup>6</sup> Nietzsche: *Die fröhliche Wissenschaft*. § 370 (Stuttgart: Kröner, 1965, S. 283 ff).

<sup>7</sup> これらの全体認識に関しては、ショーペンハウアー自身の著書に加えて、後期ハイデッガーの諸著作、オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』、ハンナ・アレントの『人間の条件』、ジャン・ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』などを参照されたい。なお、以下においては、ニーチェのディオニソスのペシミズムとの対比は行われぬ。その前に、ショーペンハウアーの視点からは、ニーチェのディオニソスのペシミズムを構成する古代ギリシャ的な名のないペシミズムと、ニーチェによって古代ギリシャへ無意識に、ないし意図的に持ち込まれた近代市民社会の意志との関係が解きほぐされなければならないだろう。

<sup>8</sup> 新約聖書ローマ人への手紙六章二十三節など参照

<sup>9</sup> Aristoteles: *Politica*, 1254a-1254b (『政治学』) など参照

<sup>10</sup> 新約聖書ピリピ人への手紙二章六 - 八節

<sup>11</sup> 新約聖書マタイによる福音書五章三節、八節

<sup>12</sup> Meister Eckehard: *Deutsche Predigten und Traktatus*. Hrsg. Josef Quint, München 1978, S. 303 f (説教「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。」) 参照

<sup>13</sup> WI, 456f §68; 479-483 §70 (『意志と表象としての世界』) など参照

<sup>14</sup> E, 203f, §15, 16 (『倫理学の二つの根本問題』) 参照

<sup>15</sup> マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、資本主義を生みだす精神的支柱となったプロテスタンティズムの世俗内禁欲の倫理の形骸化を指摘したとき、まさにこの事態が引き起こす消費社会化を予見していたのであろう。

<sup>16</sup> Ulricis Rezension von Heym: „Schopenhauer“, in: *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik* 45 (1864), S.298 など参照